『語学教育研究論叢』第 36 号

時事問題から学ぶ異文化理解の探求

永田　真一

La réflexion sur la différence culturelle via l'étude des actualités

NAGATA Masakazu

L'échange avec des étrangers ne peut se faire efficacement sans connaître la société à laquelle l'interlocuteur appartient. L'analyse en profondeur de l'actualité dans le monde permet d'aider à la compréhension du contexte culturel tacite concerné, et par ce biais la communication linguistique sera approfondie.

1. はじめに

多くの日本人にとって、外国語の習得は難しいという。いきおい外国人との交流の機会もそう多くはなく、何だか特別なこと、難しいことと思われがちである。グローバル社会に出る若者はせめて英語くらいは身につけねばならないとの言説が概ね共通了解になって久しい。訪日外国人が 4000 万人になんなんとし、国内にいながらでも非日本語話者との交流、接触や業務上の対話が避けて通れなくなっている今日、外国語を使いこなせる人材の強み、外国語教育の重要性は増加の一途である。

さて、外国語を学ぶ際、国際交流という耳あたりのよい表現とは裏腹に、

多くの先人たちが「文化的な相克」とでもいうべきものに向き合ってきたことを我々は経験的に知っている。1964 年の東京五輪では、羽田空港に到着した世界各国の言語的出自の豊かな 93 か国の選手団に、「トイレ」「タクシー乗り場」「駅」「禁煙」といった行き先や区域を迷うことなく瞬時に伝える手法が課題となった。現代までオリンピックの「遺産」の一つとして継承されているこのピクトグラムの開発を担ったのが、中国語に不自由でありながら満州で育った経験から、言語に関わらず同時代の人類に普遍的に通用する表示を考えることができる日本のデザイナーであった[1)]。言語やその文化的背景を踏まえた上での正確・迅速なコミュニケーションのために必要な素養が何かを雄弁に物語る事例といえる。

この観点から、国際社会で活躍する人材を教育する大東文化大学において「英仏語圏文化交流」が開講されてきたことは、至極重要なことである。外国語人材が真にその強みを発揮するためには、伝えたい内容を持っていること、主張する意思があること、そして語学に精通することは勿論だが、その際、彼我の文化的背景の異同を踏まえ、他言語において言葉を紡ぎあげ、あるいは端的にジェスチャーや図示などを用いて伝える力が必要[2)]なはずである。

このような問題意識の下、2015～2018 年度の「英仏語圏文化交流」講義においては、国内外で生起する出来事のうち、とりわけ諸外国と我が国との間での社会的評価や判断基準に差異が生まれそうなものを取り上げ、問題提

---

1) 笹川スポーツ財団『1964 東京大会を支えた人びと　第 68 回 1964 年をきっかけに世界へ広がった「ピクトグラム」村越愛策』(http://www.ssf.or.jp/ssf/tabid/813/pdid/264/Default.aspx#tabs-3)

2) 初等中等教育における英語教育の重要性を訴えた文科省の有識者会議提言でも、わずかながら次の指摘がある。「社会のグローバル化の進展への対応は、英語さえ習得すればよいということではない。我が国の歴史・文化等の教養とともに、思考力・判断力・表現力等を備えることにより、情報や考えなどを積極的に発信し、相手とのコミュケーションができなければならない」(「今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」平成 26 年 9 月 26 日英語教育の在り方に関する有識者会議)

起し、考察、分析を学生とともに行ってきた。特に気を付けたのは、日本社会がこれまで一丸となって経済成長に向かう過程で身に着けてきた強みの根源であるところの上意下達[3)]を避けること。教員は答えを示さず、少しでも学生が自分の頭で考えること。正解のない問いに、学生は時にうろたえ、たじろぎ、言葉を失ったが、同時に自ら深く考え、共感し、本来あるべき社会の多様性に寄り添って議論する態度を自らに内面化する喜びを知り、身に着けていった。

ここでは、講義において扱った題材の一部を紹介しながら、適切なコミュニケーションにおいて語学習得と一体不可分であるところの文化的背景の相克理解について、時事問題などを通じて学生に問いかけた視点を振り返りつつ、かかる正解のない「ありのままの現実」に対する考察、分析、問題提起あるいは共感のトレーニングの試みを紹介することを目的としたい。なお、講義と同様に、本稿においても生起した事実やそれに対する文化的態度について、当該事案を取り扱う理由を説明する必要を超えての解釈や結論を提示することはせず、視座の提示をするにとどめることとする。

2. 取り扱った時事問題とその視点

題材は日々の暮らしの中から政治行政に関するものまで幅広く存在する。ウォーミングアップとして、身近な例を 1 つ挙げよう。

Amazon.fr で注文していた荷物が届いた際に留守だった場合の「不在連絡票」。

海外の貨物輸送会社から持ち帰りの理由としてチェックマークが入っていたのは、「宅配ボックスがいっぱいでした」の欄。ところが、我が家には宅配ボックスが設置されていない。日本流に根差してより厳密かつ正確に記述

[3)]「結び」でも触れるが、自律的個人による思考、それに基づく行動が適切なコミュニケーションにおける態度であるべきあり、これに反する思考停止型の日本社会における態度を、仏フィガロ紙東京特派員のレジスアルノー記者は「ハチ公メンタリティ」と呼んで批判している。

するならば、「お宅には宅配ボックスがなく、隣人に預けるという習慣もない地域でありましたので」とすべきだろう。一方で、広い概念でとらえれば、この場合、宅配ボックスがいっぱいであることと、宅配ボックスがないこと等とは、配達と文化的に同一視される行為に至ることができないという意味で、「同じ」なのだ。しかし、それらは本当に同じなのか。日本の中でも地域や個人の育った環境によっては同じとみなすどうか見解が分かれるかもしれない。

コミュニケーションを円滑に行う上で、正しく外国語を用いることと、このような文化的なとらえ方の違いがあるということを理解、解釈、応用できるかどうかということが、日常においても重要になってくるという一つの例を紹介した。

以下では、実際に講義で取り扱った事例について考察することとしたい。

(1) 帰化の儀式にみる国籍再考

国籍に関しては親の国籍を継承する方式の「血統主義」と、生まれた場所で判断する「出生地主義」という方式がある。フランスでは国籍取得要件を満たした者に対し、各地方長官臨席の下、国歌斉唱など帰化の儀式[4]が行われるのが通例である。2015 年にパリで起きたテロ事件の際に食料品店で 15 人の客をかくまって命を救った功績を多として、マリ人の男性が当時のバルス首相、カズヌーブ内務大臣からパスポート贈呈とともにフランス国籍を授与されたという事例もある。

法務省の公式ウェブサイトによると、日本の国籍取得者数は平成 29（2017）年 966 人であるのに対し、フランスにおける 2017 年の帰化者の数[5]は 114,274 人と桁違いであるが、フランスはこのような儀式を丁寧に行って

[4] 動画サイト Youtube で naturalisation などと検索すればその模様を見ることができよう。

[5] Acquisitions de la nationalité française en 2017 Données annuelles de 1999 à 2017, Insee, 2018 年 7 月 26 日 https://www.insee.fr/fr/statistiques/2381644#tableau-Donnes

いる。なぜだろうか。これには、国籍取得要件に関連して○○人である資格をどのように考えるか、帝国主義時代や革命などの歴史、地理的背景、国民への統合の容易さなど様々な議論が必要だろう。なお、ある外国人記者は、日本においてはどんなに流暢な日本語が話せたとしても「ガイジン」扱いされることから逃れられないという趣旨のことを書いている[6)]。

(2) 信号機にみる社会ルール考察

日本の歩行者用信号機には、「青」と「赤」を背景として一人の人間の絵が浮かび上がるのが一般的である。この社会的インフラから、社会のあるべきルールを考えたとき、どんな視点がありうるだろうか。

まず、日本ではどんなに交通量が少なくても、「赤信号は渡ってはならない」との社会規範が存在すると思われる。しかし、フランス人の 40% は赤信号でも構わず渡る[7)]という。

さらに、ある日本の番組で、数十年前に同性愛者を揶揄したお笑い番組をそのまま今日、再放映したところ、大きな批判を浴び、謝罪に追い込まれるという事案があった。その一方、海外では、いわゆる同性婚を認めるところもあり、都市によっては信号機に同性カップルが映し出されるところもある[8)]。

かくして、「ルールを守る」という概念について様々な考え方が存在する

---

6) コリンジョイス「ニッポン社会」入門、NHK 出版、186 頁、2006 年

7) 在日フランス商工会議所の機関誌 France Japan Eco は次のように指摘する。『「フランス人は、日本人よりもかなり高い割合で赤信号でも道路を渡っているのではないか」という問題がとうとう科学的に証明された。名古屋とストラスブールの交差点で行われた調査結果によるとフランス人の 40% が赤信号でも構わず横断し、一方日本ではこのような信号無視がわずか 2% に過ぎなかったという。しかも、フランス人は大抵誰かにつられて赤信号を渡っており、横断時に安全確認することもなく、前を歩く信号無視の歩行者に何も考えず追従する人が非常に多いことも調査により明らかにされた。』（2017 年 7 月 4 日）（ウェブ版 http://www.ccifj.or.jp/jp/publications/magazine-france-japon-eco/macro/n/54802/54802/）

8)「同性カップルが手をつなぐ歩行者用信号登場、マドリードに」、ロイター通信、2017 年 6 月 7 日（https://jp.reuters.com/article/world-pride-madrid-idJPKBN18Y0LR

ことが講義における議論の焦点になっていく。その考察に当たっては、同性婚の問題にとどまらず、夫婦別姓についてはどうか、日本の伝統的家族観とその起源、日本の少子化現象、安心して子供を持てる環境など、あらゆる角度から日本の社会について検討を深めることが必要となる。明治以降の近代化、もはや戦後ではない、モーレツ社員など、日本がたどってきた歴史とともに価値観や人の幸せのありようを振り返り、理解しながら、外国のそれと比較し、自らの言葉として表現していく準備が整うのに必要な作業である。

(3) 外国の政府要人等間の挨拶

2009 年 11 月 14 日、アメリカ合衆国のオバマ大統領は皇居を訪問し、天皇皇后両陛下に対しほぼ 90 度のお辞儀をした。また逆に、2018 年 7 月 13 日、同じくアメリカ合衆国大統領のトランプ氏がイギリスを訪問し、ウィンザー城に招かれてエリザベス女王に拝謁した際の挨拶で、お辞儀をしなかった。

これらはともにメディアに取り上げられ、批判が加えられている。ある時は頭を下げすぎて批判され、またある時は頭を下げずに批判される。一体なぜなのだろうか。

オバマ大統領が行った「最敬礼」は、純粋な日本社会の評価基準から見るならば、日本文化や日本のしきたりを理解した上で、「郷に入れば郷に従え」との観点からも、正しいコミュニケーション態度[9]に出たものといいうるが、米国では、「米国をおとしめるもの」との報道がなされた[10]。

同じ観点でいえば、イギリスの慣習はどうか。イギリス王室の公式ウェブ

---

[9] 米国国務省の公式ウェブサイトには次のような記載があり、挨拶にもキス、握手、お辞儀といった異なるローカルルールや慣習があることを学ぶ必要があることを指摘している。“(…)you will need to learn about the local informal customs as well. (…)You will also need to be aware of different greeting rituals such as kisses, handshakes or bows.” (https://www.state.gov/documents/organization/176174.pdf)

[10] 「オバマ大統領による天皇陛下へのお辞儀、米国で論争」、AFP、2009 年 11 月 17 日（http://www.afpbb.com/articles/-/2664517?pid=4921731）

サイト[11]においては、義務ではないが一般に望ましいこととして、女王陛下に対して男性は首より上を傾けて、女性は膝を曲げてお辞儀をするとの記載がある。このため、トランプ大統領がお辞儀をしなかったことなどについて批判的な報道が出ている[12]。そうであれば、オバマ大統領も日本のしきたりに従って頭を下げた、といってよいのではないか。この差はどうして生まれるのか。

なお、2015 年パリ同時多発テロを受けて連帯の意を示すためにフランス大統領府を訪れた米国のケリー国務長官とこれを迎えるオランド大統領の間にも、挨拶における「カルチャーギャップ」が生じた。ケリー国務長官は連帯を示すためのハグ（抱擁）を求めたが、フランス（特にパリ）では頬にキスを二回するのが一般的であることからオランド大統領はキスでこたえようとした[13]。

こうした「すれ違い」はコミュニケーションをする上ではままあるものだが、それが時に問題に発展することがある。受け手の側、あるいは発信側の所属する社会のいずれかの人々が受け入れがたいとみなすことが起こりうる背景事情について、できるだけ事前に考察・分析を行う必要があるだろう。

(4)「プールに入る前には、シャワーを浴びてください」

公共のプール施設にこのような注意書きがあったとして、これに驚き憤慨する日本人は稀だろう。小学校のプールの授業でも習っているはずである。しかし、スイスのあるホテルでなされた次の掲示をどう読むだろうか。

---

[11] イギリス王室公式ウェブサイト（https://www.royal.uk/greeting-member-royal-family）

[12] 例えば、“Trump Walks in Front of Queen Elizabeth, Causing Social Media Frenzy”, New York Times, July 14, 2018 (https://www.nytimes.com/2018/07/14/us/trump-walks-front-queen-elizabeth.html)

[13] “Le hug: How John Kerry made a Paris cheek-kiss faux pas”, The Telegraph, 16 January 2015 (https://www.telegraph.co.uk/news/worldnews/europe/france/11351244/Le-hug-How-John-Kerry-made-a-Parisian-cheek-kiss-faux-pas.html)

“To Our Jewish Guests, Please take a shower before you go swimming...”[14)]

もし、「日本人はシャワーを浴びてください」と書かれてあったらどう感じるだろう。プール前のシャワーは、「成人男性の方は」「お年寄りの方は」など、特定の分野に限定して呼びかけられていい気のするものではないと分かる。本件では、ユダヤ人のお客様はシャワーを浴びてください、と名指ししていたことなどについて、写真付きで SNS 上に拡散され、イスラエル当局などから「反ユダヤ主義」として厳しく批判される結果となった。

なぜホテルの支配人はこのような記述をしたのだろうか。報道によれば、客の中にユダヤ人が多かったことなどから支配人はこのように書いたと主張しているようである。思わぬ誤解や差別的表現を招かぬよう、単に Our Guests とすべきだったのではないか。人類には反省すべき歴史がある。現代に生きる者として、歴史を知ったうえで、無知や無邪気による表現で誤解を招き、結果として人を傷つけ、意図せざるコミュニケーションを生じることは避けなければならない責任があるだろう。

(5) 勘違い騎士道事件

コミュニケーションにおいて、言葉と態度が正しく伝わるとはどういうことであるか。表現されたボディーランゲージや発話が、受け手側に正しく伝わらないケースもある。状況に関する深い文脈理解を欠いたがために誤解され、文字通り致命傷につながってしまった不幸な事件があった。例えば、昭和 56 年に起きた「勘違い騎士道事件」と呼ばれる事件を、少し長いが次に引用する[15)]。

[14)]「ユダヤ人はシャワーを浴びろ」でスイスのホテルが炎上した理由、ニューズウィーク日本版、2017 年 8 月 18 日（https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2017/08/post-8248.php）

[15)] 渡邉譽「誤想過剰防衛」、南九州大学研報 39B、45 頁、2009 年

“日本語の理解が不十分な来日 8 年の空手 3 段を有する英国人であったが、酩酊したＡ女とＢが揉み合いとなり、Ａ女が転倒して尻もちをついたのを見てＡ女がＢから暴行を受けていると誤信し、Ａ女を助けようとしたところ、Ａ女が「ヘルプミー」と叫んだので、Ｂの方に振り向き両手を差し出してＢに近づいたところ、Ｂがボクシングのファイティングポーズのような姿勢をとったので、自分にも殴りかかってくるものと誤信してＸは自己およびＡ女の身体を防衛するため、とっさに空手技の回し蹴りにより左足をＢの顔面に当て、同人に頭蓋骨骨折等の傷害を負わせ、8 日後に死亡させた”

判決文の事案を読むと、Ａ女は酩酊し暴言を吐くなどの状況にあり、Ｂ（被害者男）は見かねてなだめていたようである。しかし、映画の帰りに通りがかった空手 3 段の英国人は「やめなさい、その人はレディーですよ」などと止めている。実際には暴れていたのはＡ女なのに、Ａ女が暴行されていると思い込んだのだ。

また、酩酊中のＡ女からヘルプミーと言葉で助けを求められ、Ｂがファイティングポーズを取ったことから、レディーに暴行した上、自分にも危害を加えようとする「敵」と考え、Ｂを制圧した（裁判では、空手の回し蹴りはやりすぎであり、正当防衛の状況にもなかったため、執行猶予付きの有罪判決となった）。

このような不幸な誤解はなぜ起きたのだろうか。もしこの英国人が、日本語がもっと流暢だったら、あるいはＡ女やＢらの英語表現力があれば、この誤解は防げたのか。少なくともこの武道好きの英国人が、「Ａ女が酩酊しているのをなだめているＢ」という状況を正しく認識できなければ、どんなに言葉で伝えても誤解は解けなかったかもしれない[16)]。

さて、女性に対するセクシュアル・ハラスメントを、女性自らが SNS で告発する #MeToo 運動[17)]が世界的に広がっている今日、「レディーは助けられるべき対象」との暗黙の前提が「騎士道」を構成するのかどうか[18)]。この

事案の呼称を使い続ける日本の法学者たちとともに、考えてみたい視点である。

3. 結び

所属社会の価値観から自由になり、いわば外の視点を得ることで初めて、その社会のよさや束縛、思考停止にさえも気づくことができる。例えば、ある長野県の関係者が「長野には海がない。マグロはごちそうになる。したがって、県外から来客があったときはハレの日でありごちそうを出すべきだからマグロを出す。しかし、客は変な顔をする。長野には山のものを食べに来たのに、鮮度が落ちるはずの海のものが出てきたと。そこで初めて、客は長野の名産を求めていると気づいた」と述べるときのように。

良質で適切なコミュニケーションとは、このように立場の互換性を前提とした自律的個人の存在と無関係ではいられない[19]。

勤勉で真面目な日本人という固定概念がある。最近日本の有名な組織で不祥事が相次いで起きているが、能吏として勤勉に命令を執行したナチスのアイヒマンを想起するとき、一歩外に出て世界と関わり、彼我の文化的な相違から気づきを得るとともに、自ら考え、分析しながら、正しい言葉と態度で適切なコミュニケーションを生み出すことは、日本社会、国際社会の健全な

---

[16] 1992 年、米国で起きた日本人留学生射殺事件も想起されたい。ハロウィンで仮装したまま違う家を訪問し、銃で撃たれて亡くなった日本人留学生について、被害者が「フリーズ」(freeze) を「プリーズ」(please) と誤解したと報じられている。他方、被害者は We're here for the party と応じたとされており、単に英語表現力の問題に帰せられる問題というよりは、米国の銃社会、治安情勢といった状況をも考慮に入れるべきとの示唆が読み取られうる。

[17] 2018 年の講義では、ルモンド紙東京特派員のフィリップ・メスメールを招き、#MeToo 運動や日本における男女関係の現代的認識について学生とディスカッションを行った（その模様の一部は "Les Japonais ne badinent pas avec l'amour" というタイトルで 2018 年 8 月 10 日同紙記事に掲載された）

[18] その点も含めて「勘違い騎士道」と再定義するという議論もありうるかも知れない。

[19] 正義とは立場の反転可能性であるとの主張もある。井上達夫『共生の作法―会話としての正義』創文社、1986 年

発展につながる行為なのである。

単純化していえば、「すみません」という日本語を正しく伝わるように英訳するには文脈理解を踏まえて sorry や excuse me、場合によっては thank you と訳し分けられる必要がある。この能力の習得には、本稿で見てきたように語学学習とは時に独立して学び、国際社会で日々生起する出来事を主体的かつ自覚的に課題として捉え、考えることが不可欠であるように思われる。

本稿は、そのための思考実験の場として、大東文化大学外国語学部で行っている「英仏語圏文化交流」の講義において、国内外の時事問題などを題材として、結論や正解が必ずしも存在しない開放的な議論や考察を学生とともに行っていることを紹介した。このような思考訓練を積むことを通じて、いわば足腰を鍛えることは、語学習得そのものの鍛錬と相まって、外国語コミュニケーション能力において重要な役割を果たしうるのではないかと考えるものである。